



Title	王兵作品研究 [全文の要約]
Author(s)	朱, 偉
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15212号
Issue Date	2022-09-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87168
Type	doctoral thesis
File Information	Wei_Zhu_summary.pdf



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名：朱偉

学位論文題名
王兵作品研究

・本論文の観点と方法

本論文は、中国映画監督・王兵（ワン・ビン）の作家論である。本論文では王兵の主要な作品を分析対象として、ドキュメンタリーと劇映画の映像表現の方法論を中心に、映像表現に付随する表象の問題、小説とドキュメンタリーと劇映画の境目、技術的な可能性、監督の芸術的特異性といった課題について考察し、王兵作品の全体像の把握を目的としようと試みる。

・本論文の内容

本論文では、王兵作品のほとんどを対象として取り上げるとともに、王兵作品における主題、映像表現（＝カメラワーク）、記憶・証言を撮ること（＝歴史の表象）、弱者の表象などの問題について検討する。そして、王兵が一貫して取り組んでいる映像表現の可能性、個人的な体験の貴重さ、いかにして他人の記憶に入ってゆくかという課題を議論することによって、「映像の労働者」としての王兵の芸術的特異性を明らかにする。本論文では本論文部分を八章に分けて、それぞれ王兵の代表的な作品に対する考察を行った。

第一章では、瓦礫と廃墟における特別な領域、すなわち「工場廃墟」としての『鉄西区』（第一部「工場」）の映像を手がかりとして、「工場廃墟」がどのような意味をもつのか、王兵監督がなぜ・どのように瓦礫と廃墟を表象するのか、そして瓦礫と廃墟を記憶する行為がどのような空間と時間によって表現されているのかを明らかにした。第二部と第三部で、王兵は廃墟の視覚的表現をさらに展開し、青年たちの青春と老朽化している廃墟の対比を通して、あるいは工場廃墟の発生に従って生活を変えていく父子の映像を通して、多重の廃墟の「生命状態」を表現している。具体的に言

えば、『鉄西区』における三部の「工場」「街」「鉄路」は「予兆としての廃墟」「廃墟となった姿」「廃墟のなかの人々」という「生命状態」に対応し、王兵は鉄西区の「老朽—廃墟化—消滅」という過程を展開した。そして、『鉄西区』における時空間構造、労働者の身振り・裸体、王兵・カメラの眼差しを通して、王兵が中国における一つの「ユートピアの崩壊」と、赤裸々な労働者の身体を瑞々しく表した点を考察した。

第二章では『鉄西区』におけるカメラの「撮る＝掘る」機械的な機能、シーンの中でミザンセーヌの働き、労働者の労働とレジャー、王兵作品に貫いている一回性/即興性について論述した。小型化、長時間撮影可能という利便性をもつ革新的デジタルカメラが、王兵作品の中に活性化されている。王兵はデジタルカメラで機械的に撮るのではなく、映像表現手法上で絶えずコツコツ「掘る」＝発掘する姿勢を見せてくる。つまり、新技術は新たな映像表現手法をもたらしている。もっといえば、王兵作品の中で新技術と新たな映像表現手法との結合によって、新たな表現力、新たなリアリズムのスタイルと美学も発明されているのではないだろうか。この意味で『鉄西区』はまさに画期的な作品に違いないだろう。

第三章では、王兵の二作目『鳳鳴——中国の記憶』を取り上げ、そのなかでの証言に注目した。本作は一見して「証言映画」に属しているように見えるが、実際には「証言映画」から明らかに逸脱している。まず、『鳳鳴』における時間構造である。王兵が鳳鳴の語りの時間をもとに映画の時間を意図的に構造化した。そこに、鳳鳴がいかにかに語るのかという「言説のフィクション」が加算される。そして、『鳳鳴』が、自伝『経歴 私の1957』とは異なり、映画版における言葉と肉声の間に微妙な相互作用が果たされていることを分析した。さらに、顔＝クローズアップの場面において、対象に干渉・介入しない王兵の手法によって、鳳鳴の証言における事実とフィクションの曖昧さを引き出していることを分析した。結末における電話場面において、画面外にいる鳳鳴と正体不明の生還者の会話によって、外への繋がりを示していることも明らかにした。最後に、ランズマン『ショアー』における生存者の沈黙と鳳鳴の沈黙をめぐって、「いかに歴史を語る」という課題に対して王兵がフィクション性の導入を試みたことを検討した。本作において、監督による演出の介入やフィクション性が際立っている。要するに、『鳳鳴』は従来の「証言映画」と明らかに異なっているのである。その特異性は、王兵のフィルモグラフィーにおいても、またドキュメンタリーの

映画ジャンルにおいても、特殊な位置を占めていると考えられる。

第四章では、『鳳鳴——中国の記憶』を中心に、王兵の特殊な方法論、彼の映像の「貧しさ」について論述した。映像表現の手法の「貧しさ」によって、王兵が自由な想像と多面的な意味がもたらされ、多義的な解釈が生まれる。王兵と被写体との間にどのような関係があるのか、彼がどのような立場・視点・世界観を持っているのかという隠れた側面を明らかにした。『鉄西区』をはじめ、『鳳鳴』に至るまで、王兵が独自のパターン・独特な手法を創造している。『鳳鳴』から、固定的な映像表現形式が形成され、それは以後の作品群まで進化していく。

第五章は『名前のない男』論である。本章では、本作における全編構造、時空間の表象、無名男の身体と土地、風景・殺風景との関連性を論述した。更に映像の労働者としての王兵の性格、彼の映像の性質についての考察も行なった。時空間の表象や人物の表象において、「中途半端」であることを監督は意識している。つまり表現対象に美感と意味を与える途中で、王兵は突然立ち止まって、中途のなかに放置するという創造意識である。他の作品でも王兵は映像表現に対してこの特殊性を持っている。彼の劇映画であれ、ドキュメンタリーであれ、ビデオアートであれ、フィクションとノンフィクションの境目で揺れ動くのはまさにこのためであり、それは私たちに混乱させると同時に、私たちの心を捉える。

第六章は王兵の初の長編劇映画『無言歌』論である。本章では『無言歌』を中心に、『無言歌』と原作、フィクションとノンフィクション、彼の突破した映像表現を分析してきた。とりわけあいだの問題について検討を加えた。本作では、王兵監督はドキュメンタリーの映像表現の手法を多用し、自然環境、歴史、登場人物の絶望を表現している。重要なのは、王兵監督が画面内と画面外、画面内の空間のあいだに、空間から空間へ絶えず移動することを強調しながら、ドキュメンタリーとフィクションのあいだで、廃墟と聖地とのあいだ、肉体と精神のあいだに多数の「変異点」が形成されており、王兵作品に独特な審美感を形成していたということである。

第七章では、『死靈魂』を中心に、王兵のこれまでの反右派闘争を主題とした作品と比較しながら、本作における全編構造、登場人物の特性、記憶・証言の特異性についての分析を行った。「証言映画」の代表作としての『ショアー』を比較すると、『死靈魂』における欠点が発見された。つまり歴史と現実、映像と記憶という関係性に関する複雑さが、王兵の歴史的ドキュメンタリー映画の作品群には欠けていると思われ

る。または、本作においては、未来への想像も足りないという王兵の欠点も指摘し得る。

第八章では、王兵作品におけるデジタルカメラが内在する自動性と過剰性について論じた。王兵作品では、王兵が全体的な構造が設置され、ワンショットの中で高濃度の雰囲気を作られ、映像の「映画性」が自動的に生成される。王兵作品の明らかな特徴は、形式と内容に高度な統一性が見られるということである。彼は内容の異なるさまざまな作品においても、すべて類似した映像表現を保持しており、異なる登場人物に対しても、それまでと同様の撮影、編集手法のもとで映画を製作している。つまり、映画の映像表現と表現対象・内容という両方の統一を実現しているのである。王兵自身がデジタルカメラを持ち、日常生活を通して、さらに歴史・記憶・現実を掘り起こし、その行動力によって映画の世界に新たな可能性をもたらしたのである。